

4. 知的障害に関する基本的な理解と支援の手立て

(1) 知的障害の概要

知的障害とは、知的機能の発達に明らかな遅れと、適応行動の困難性を伴う状態が、発達期に起こるものをいいます。ここで示されている適応行動の困難性とは、他人との意思の交換、日常生活や社会生活、安全などについて、その年齢段階に標準的に要求されるまでには至っていないことを表しています。例えば、言語面では、発音が明瞭でなかったり、言葉と言葉をつないで話すことが難しかったりすること、運動動作面では、走り方がぎこちなく、安定した姿勢が維持できないことや衣服のボタンかけやはさみなどの道具の使用が難しいこと、情緒面では、失敗経験が積み重なり、自信がもてず絶えず不安が多いことなどです。

(2) 知的障害のある幼児などに見られる行動等の特徴

障害の状況により、遊びや生活の中で以下のような姿が見受けられます。

- ・先生や他の幼児をまねたり、遊びの中での学びが他の遊びに生かされたりしにくい
(例えば、遊びの中で歩幅で長さを測る体験があっても、長さを測る別の場面で歩幅を使おうとは思わない)
- ・登園時の身支度などの日々のルーティンであっても、比較的時間がかかることが多い
- ・絵本などの読み聞かせでは、物語の内容が具体的にイメージできない、物語の予想がたてられないなどにより、十分に楽しむことができない
- ・他の幼児が嫌がることを注意しても繰り返してしまう傾向がある(例えば、砂場で泥水を他の幼児にかけることを注意しても、繰り返してしまう)

こうした姿は遊びや生活の場面の随所で見受けられます。知的障害のある幼児などの実態を把握するためには、どのような場面でのどのような当該幼児の姿に注意すればよいのかについて知っておくことも大切です。以下に、いくつかの例を示します。なお、幼児期はこれから、言語を獲得したり、生活習慣を身に付けたり、他者と関わったりしていくようになる時期であることに十分に留意する必要があります。

- ・意思の交換や言語の活用場面では、簡単な言葉の指示が分かるか、名前を呼ばれて振り向くか、「ねこ」「靴」「ボール」などを聞いてその絵や写真を指差すか、「ちょうだい」「やって」などの簡単な要求を言葉で表すか、「こんにちは」「さようなら」など簡単な挨拶に応えられるか、日常会話や簡単な指示を理解しているか、文字や数への興味や関心があるかなど
- ・身辺処理等を行う場面では、食事の可否、衣服の着脱の可否、排泄^{せつ}の可否、簡単な片付けの可否など
- ・先生や他の幼児等と関わる場面では、視線を合わせられるか、好む活動を選んだり物を示したりすることができるか、自分から他人に働き掛けるか、簡単なきまりが理解できるか、身近な危険の察知や回避ができるか、興味や関心が移りやすいか、多動性があるか、固執性（こだわり）があるかなど

(3) 知的障害のある幼児などの抱える困難さに応じた支援の手立て

幼児は、生活の中で自分の興味や欲求に基づいた直接的・具体的な体験を通して、物の性質や仕組み、自然の仕組み、人との関わり方などを学んでいきますが、興味や関心、学びの内容や速度は個々の幼児によって異なります。

知的障害のある幼児などは、興味や関心が広がりにくかったり、同じことを何度も繰り返しても身に付けにくかったり、体験から得たことが別の場面で活用されにくかったりすることがあります。

知的障害のある幼児などが、遊びや生活の中でどのような困難さを感じ、そういった困難さに応じてどのような支援の手立てがあるのかを考え、当該幼児の実態に応じた支援をしていくことが大切です。知的障害のある幼児などの困難さや困難さに応じた支援の手立てとして以下が考えられます。

①知的障害のある幼児などの抱える困難さ

- ・コミュニケーションの基礎的能力が育まれにくい

音声言語の理解や表出に困難をもっていることも多く、相手の言葉やその意図が理解できなかつたりすることがあります。例えば、先生の指示が理解できず、集団行動についていけず遅れてしまったり、さらには、十分に指示等を理解していなく

ても、「はい」、「分かった」という返事をしてしまったりすることがあります。分からないことや嫌なこと、不安に思っていることがあっても、上手く意思表示できないこともあります。

- ・抽象的な話や場の状況、集団のルールを理解することが難しい

物事を一般化して抽象的なことに置き換えることが難しい場合があります。例えば、リンゴとブドウは形も大きさも色も固さも異なり、それらを果物と呼ぶためにはその違いを捨て、共通の性質を取り出して一般化しますが、こうしたことが分かりにくいいため、他の幼児と果物屋さんごっこをするときに、どれが果物なのか、商品をイメージできなかつたりします。さらに、遊びなどのルールが分からず、他の幼児が遊んでいても仲間に入れなかつたりすることがあります。

- ・見通しをもつことが難しい

時間の概念の理解が不十分であることが多く、次の予定を具体的に捉えたり、先のことを予測したりして行動することが難しいことがあります。例えば、健康診断や発表会などの行事があり、朝から並ぶ、集合する、場所を移動するなど、毎日の登園時の活動とは異なる活動を行ったり、天候が急変して降園時のお迎えの場所を変更したりして、いつもとは違うことを求められたりするなど、状況が少し異なると、どのように行動してよいのか分からずパニックになることがあります。

- ・集中して持続的に行うことが難しい

活動に集中して取り組む持続性が育まれにくく、興味のあることは集中して取り組めますが、興味をもてなかつたり長時間にわたる活動では、他の幼児と一緒に活動することが難しく、「疲れた」「もう終わり」などと言い、その場を離れようとすることがあります。

- ・手先を使った細かい作業をすることや、感覚を総合的に活用して周囲の状況を把握し状況に応じて行動することが難しい

手先や手指を上手に使う力が育まれにくかったり、身体の別々の動きを一つの動きとしてまとめることが難しかったり、日常生活場面等における経験不足などから、例えば、着替えにおけるボタンの着脱やシール貼りなどの細かい活動、はさみなどの道具の操作が難しいことがあります。紙をはさみで切る際には、一方の手で紙を動かしながらもう一方の手ではさみを開閉しますが、両手を調和させて動かすことが上手くできず、切り口が曲がったりギザギザになったりします。

また、自分の身体に対する意識や概念が十分に育っていなかったり、位置や方向、遠近について状況が把握できなかつたりするため、人や物にぶつかったり、簡単な動作をまねすることが難しいことがあります。運動機能の獲得に時間がかかる傾向があるため、一つの準備や動作に時間がかかります。例えば、衣服の着脱では、脱衣のときに、手で上衣を持ち上げながら両手を万歳にしたまま上手く脱げなかつたり、着衣のときは、衣服の前後を確認して衣服を置き、頭や腕をどの口に通すのか分かりにくかつたりして、最初からやり直すことも少なくありません。体を動かすダンスや体操などでは、先生の動きを見てまねたり、リズムに合わせて踊つたりすることは難しく、大きい動きになつたり、リズムよく止まれなかつたりするため、近くにいる幼児とぶつかってしまうことがあります。

②困難さに応じた支援の手立て

幼児の知的障害の状況や生活経験等を踏まえて、できたところを認めたり、ほめたりすることで、当該幼児が主体的に意欲をもって活動に取り組む力を育むことが大切です。例えば、次のような支援が考えられます。

- ・ 抽象的なことへの理解が困難であることに留意し、できるだけ具体的な指示で指導することが望まれます。例えば、手を洗うことを指導する場合、言葉だけで教えるよりも、先生と一緒に手を重ねて洗つたり、実際に手を洗って見せたりすることが必要です。また、危険な場所や、してはいけないことを教える場合にも、何回も実際の場所に連れて行き、根気よく、優しく、はっきり話して伝えることを繰り返します。
- ・ 興味や関心のあることや生活上の場面を取り上げ、実物や写真を使つてみたり読んだりして、理解できるようにすることが考えられます。例えば、言語の理解を促すために絵カードなどの視覚的な情報を補足するなどの工夫をすることも考えられます。こうした対応により、理解できる語彙を増やし、相手の話を聞き取ろうという姿勢が育つたり、自ら話しかけようとする意欲の向上につながつたりすることも多くあります。視覚的に情報を把握することが苦手な場合には、分かりやすい言葉を使つたり身体的な援助を行い、実際に体験することで学べるようにしたりすることが大切です。

- ・自分の考えや要求を表現し、相手に伝わったり、相手の意図を受け止めたりする双方向のコミュニケーションが成立する成功体験を積み重ねることが大切です。例えば、身近な「名前」を共有することから始めるなど、当該幼児ができることからやってみることが大切です。また、自分の気持ちを表した絵カードを使ったり、簡単なジェスチャーを交えるなど、要求を伝える手段を広げたり、人とのやり取りや人と協力して遂行するゲームをするなど、コミュニケーションの基礎的な能力の活用を促すことも考えられます。
- ・活動に当たって、当該幼児が興味や関心をもち、いろいろな遊具や用具、素材を遊びに取り入れ、目的に合わせて手指を効果的に使えるようにする工夫があります。例えば、手遊びやビーズなどを仕分ける活動、ひもにビーズを通す活動など、目と手とを調和させて動かすなどができるような活動が考えられます。その際、単に訓練的な活動とならないよう、先生は、当該幼児が興味や関心をもてる活動になるよう工夫し、楽しんで取り組めるようにしたり、ものづくりを通して達成感が得られるようにしたりするなど、意欲的に取り組めるようにしましょう。また、円滑な活動を促すために、衣服に工夫を加えて当該幼児が着脱しやすいようにしたり、道具の収納方法や物の位置、当該幼児が座る場所などにも配慮したりして、遊びに集中できるようにします。
- ・先生は、当該幼児と一緒に活動することによって、当該幼児の活動への参加を促し、当該幼児自らが達成感や充実感を味わいながら意欲を高めていくことができるようにする必要があります。また、言語発達の遅れが顕著な場合には、例えば、リズムのある掛け声や同じフレーズが繰り返し出てくる絵本や紙芝居などに親しめるようにすることが考えられます。そして、それらの体験を生かして、劇遊びなどにして、先生がいろいろな役になってモデルを示したり、日常のままごと遊びの中にも取り入れたりして、やり取りを楽しめるようにするなど、当該幼児が有している言語を最大限に生かすことができるようにするなどの言語環境を整えることも大切です。皆と一緒に活動する中で、当該幼児ができることで参加をしたり、できる役割をもたせたりして満足感が得られるようにします。

- ・全身を使って大きく動く粗大運動や、手や指を使った細かく精密な動作を必要とする微細運動を通して、全身及び身体の各部位を意識して動かしたり、名称やその位置などを言葉で理解したりすることができるよう、工夫が必要です。例えば、体の各部位を使った手遊びや歌などを取り入れ、先生がやっていることをまねながら、自分で触れて各部位に意識がもてるようにするとよいでしょう。また、先生と一緒に走るなど体を思いきり動かして遊ぶことができるような鬼ごっこを楽しんだり、さらには、「ある部位に触れていたら鬼に捕まらない」など、よりゲーム性のある要素を取り入れたりすることなども考えられます。製作活動では、体の部位を意識して取り組めるように予め画用紙で体のパーツを切って用意しておき、「走っている自分」「泳いでいる自分」「遊んでいる自分」など、頭、体、足、手などのパーツを選び、組み合わせて「自分」を作ることも考えられます。
- ・分かりやすい日課を設定し、生活のリズムが身に付けられるようにします。例えば、繰り返しできる活動をしたり、活動の手順を少なくしたり、活動の手順について言葉による指示だけでなく、写真や絵カードなどの視覚情報で示すなどすると、見通しをもちやすくなります。また、全体への指示だけでは伝わりにくいので、今することを個別にかつ簡潔に伝えたり、次にすることを知らせたりするなどの工夫が考えられます。

(4) 困難さに応じた支援を活用して園での遊びや生活を展開する

先生の必要な支援の下で、知的障害のある幼児などが園での遊びや生活を楽しみ、他の幼児との関わりを広げていけるようにすることが大切です。他の幼児との関わりを深め、遊びを展開していく際に大切なことがあります。それは、知的障害のある幼児などの困難さに応じた支援を、他の幼児との関わりや集団の生活の中で自然に取り入れていくことです。しかし、その支援によって、他の幼児が遊びを楽しめなくなることは避ける必要があります。知的障害のある幼児などが、クラスの一員として他の幼児と共に遊びや生活を楽しめるようにすることが大切です。

コラム クマさん鬼ごっこを通して（4歳児）

～先生がルールを分かりやすく行動で示す～

支援のポイント

知的障害のある幼児などが、他の幼児と共に遊びを楽しむためには、先生は、言葉による指示だけでなく、絵や写真等を用いたり、モデルを示したりすることによって、当該幼児が活動の内容や遊びのルールを理解しやすくする必要があります。

他の幼児との関わりにおける先生の思い

C児は、発語はあり、簡単な会話は成立しているが、ルールのある遊びになると、皆と一緒に遊ぶことは難しそう。鬼ごっこでは、C児も一緒に参加できるように、まずは、先生と一緒に遊ぶ中で「逃げる楽しさ」「追い掛けられるスリル感」などの遊びそのものの楽しさを味わい、視覚情報も活用しながら、少しずつ他の幼児と一緒に楽しめるようにしていこう。

クマさん鬼ごっこの様子

C児は、軽度の知的障害のある幼児です。先生は、C児を誘い、園庭に出て追いかけてこの遊びを始めました。最初は、『『ようい、どん！』で走るよ』『先生がクマさんだよ。クマさんに捕まえないように逃げてね』と言ってお面を着け、C児の走る速さに合わせて追いかけてました。そして、C児を捕まえたときには「捕まえた」とぎゅっと抱きしめて食べる振りをするなど、言葉や行動で「逃げる」「捕まる」などが分かるようにしました。

C児は、先生に追い掛けられることが嬉しく、走り回っています。ときどき、先生は「クマさん、少し疲れちゃった」「Cちゃん、逃げるのが上手だね」「なかなか捕まえないよ」と言って、スピードを落として立ち止まると、C児も立ち止まって様子を見て、「こっち」と先生を誘う姿も見られます。C児は、先生と一緒に走り回ることは楽しいようで、少しずつ顔を上げて走ることができるようになってきました。

すると、C児と先生が楽しそうに走り回っている様子を見て他の幼児も興味を示し、「Cちゃん、入れて」と数人の幼児が仲間に加わりました。先生は、遊びの人数

が増えてきたので、園庭のカエデの木の周りの地面に白線をかいて「ここはクマさんのお家ね」「クマさんがお昼寝しているときは、捕まえられないから大丈夫。でもお腹がすいてぺこぺこになると…」とお腹をすかせたしぐさを見せると、他の幼児は慌てて逃げようとしています。先生がさりげなくクマのお面を着けてクマに変身してC児に向かって「おいしそうだな、いい匂いがするなあ」とクマになりきって言うと、C児は、慌てていましたが、他の幼児が「Cちゃん、こっち」と手を取り、嬉しそうに逃げていきました。

先生が「皆、逃げ足が速くて、誰も捕まえられなかった、残念」と言うと、幼児たちは「もっとやりたい」と言いました。繰り返し遊んでいると、その後、周りの幼児から「今度は、クマさん（役を）やりたい」という幼児が出てきたので、先生は、C児と一緒に逃げることを楽しんだり、さらには、C児がクマ役になって他の幼児を追い掛けたりするなど、どちらの役も楽しめるようになっていきました。

他の幼児と共に遊びや生活を楽しむことができるような支援を考える

幼児がルールのある遊びを楽しむためには、最初は簡単な分かりやすいルールから始めることが大切です。そして、ルールを伝える際には、幼児が理解しやすいものとなるように工夫する必要があります。鬼遊びであれば、イメージできるようにイラストを活用したり、先生が行動やしぐさで見せたりするなどです。これは、障害の有無にかかわらず大切なことです。

特に、知的障害のある幼児などにとっては、ルールの理解は言葉のみの説明では難しいため、イラストなどを活用したり、実際に先生が言葉を添えながら一緒に活動したりすることによって、遊び方やその遊びの面白さ、楽しさを実感できるようにすることが重要です。

そして、遊びの中では、具体的に「逃げるのが、上手だね」「楽しいね」など言葉を掛けていき、逃げることの楽しさやスリル感、捕まえられても安心などの感情が「また、遊びたい」という意欲へとつながるようにしていきます。

知的障害の困難さは、知的な遅れにより、生活の様々な場面に現れます。新しい遊びや事柄に対して不安を示したり、参加できなかつたりすることがないように、当該幼児が「できること」「分かること」は何かを把握して始めるようにしましょう。そして、「できない」ことが「やりたくない」こととならないように、当該幼児

の「できること」に目を向け、クラスの幼児同士の相互作用の中で「できた」「またやりたい」につなげていくことが大切です。

皆と一緒に遊ぶことを積み重ねていくことで、「友達と一緒に遊びたい」という気持ちを育てていきます。